

ものがたり

慈濟

ツーチー 2018年5月 257



表見返し●

文・證嚴法師/訳・濟運/撮影・黄筱哲

一瞬たりとも 無駄にしない

一年よりも一日、

一日よりも一秒の方が重要です。

あらゆる思いは正悪をはつきりさせ、

常に過ぎたことは忘れ、

新たな方向に向かうべきです。

一歩たりとも方向を誤らず、

一瞬一瞬現れる思いが正しければ、

慧命は日々成長するでしょう。



目次

【社論】

団結して互いに愛を

慈願／訳 4

【主題報道】

メキシコ地震後 愛が根付く
希望は倒れない

黒川由希／訳
惟明／訳 32 8

【静思語】

孝行は人の基本

済運／訳 43

【特別報道】 愛のボランティア医師

遅咲きの天使の朝山礼拝

黒川章子／訳 52

【健康の玉手箱】

母の得意な混ぜご飯

明陞／訳 63

【證嚴法師のお諭し】

善を施し、善を行い、善を教える

慈願／訳 68

【人文真善美】

人生の酸いも甘いもカメラで捉える

葉美娥／訳 80

【衲履足跡】

錬磨

済運／訳 86

【書籍情報】「刀下春秋（メスを手にした歲月）」

執刀の後に省みることに

慈願／訳 91

【慈濟台湾】

銀髪之宝を抱きしめる（下）

本諦／訳 96

慈濟大事記【四月】

済運／訳 105

表紙



まるで磁力が働いたかのように、地震後のメキシコでは現地ボランティアが相次いで出現した。彼らは被災地の状況調査に協力し、配付活動にも参加するほか、現地の人々にも一緒に奉仕を呼びかけた。

（文・黄秀花 撮影・黄筱哲）

団結して互いに愛を

ラテンアメリカのメキシコは台湾と同じく環太平洋地震帯に位置する。十八年前、台湾中部大地震が発生した際、救済経験の豊富な「メキシコモグラ隊」が台湾へ救助支援に来た。二〇一七年九月、今度はメキシコが立て続けに強震に襲われ、慈済人が支援に駆けつけた。

二〇一八年の正月を迎える前、十三カ国から来た百人近いボランティアと医療スタッフは、一万世帯に物資の配付と施療を行った。三カ月間の実地調査期間中、慈済人は勝手の分からない被災地で、入り組んだ路地裏に被災者を訪問し、物資の配付と施療を行う会場を探していた。一度は膠着状態に陥り、被災者が「慈済は援助の約束を果たさないのではないか」と疑うことを慈済ボランティアは心配した。

ところが、普遍的に貧しいメキシコの人々の楽天的で素朴な性格が慈済ボランティアを奮い立たせた。例えば、彼らのお祭りである「死者の日」には、亡くなった親族を追悼するとともに、歌い踊って生命の延長を祝う。死者は永遠に親しい人の記憶の中に生き続け、離れることはないと感じている。

慈済人がボランティア活動に誘うと、彼らはこぞって参加してくれた。被災者リストの再調査の時には被災者の家まで道案内をしてくれ、同胞

の被災者を両手を広げて抱きしめた。物資の配付会場では、スペイン民謡の替え歌を披露し、歌を通じて慈済ボランティアとの間に熱い友情が生まれ、悲しい雰囲気を喜びへと変えた。

カナダに長年在住しているメキシコ人芸術家、ロドリゴも、慈済の救済支援活動に参加した。負傷者を治すことはできないが、被災者の声に耳を傾け、励ました。慈済の和やかな奉仕精神に魅せられ、彼も慈済に加わった。

メキシコの現地ボランティアは、支援チームが帰国した後も、まだ支援を受けていない被災者の調査を続け、次の配付活動を計画した。貧困とは物資の欠乏だけを言うのではない。物資は持つていなくとも、生活が簡単で、欲求の少ない人は、逆に欲望に束縛されることなく、元より備わっている心の力を発揮できることを、慈済ボランティアは目の当た

りにした。長年メキシコの貧困を研究してきたアメリカの人類学者、オスカー・ルイスはこう指摘している。「物質的水準が高くないメキシコ人は、逆に経済が発展した国の人よりも精神的に豊かである」

「共に大愛をもって衆生に付き添い、あらゆる行動で大地を護る」が二〇一七年の慈済歳末祝福会のテーマである。広大無辺な生命共同体の下では、元来人と人との間に地位の差はなく、団結して互いに愛し合うべきである。これが私たちが共有する価値観である。人は誰でも人助けをすることができ、一人一人の力を結集すれば、大衆の志は強固なものとなって、苦難や痛みを喘ぐ人を慰めることができる。

(慈済月刊六一五期より)



「泣かないで、歌おう！ 美しい空が私たちの心を暖めてくれる……」メキシコ地震後の実際的な援助は、民間版の国歌「美しい空」と同じように魂を励ます。

慈済ボランティアと現地ボランティアは協力して歴史のページを切り開き、十回の配付を無事に終えた。希望と愛の種を入々の心にもたらし、この高原の地に根付かせた。



メキシコ地震後 愛が根付く

◎文・黄秀花 撮影・黄筱哲 訳・黒川由希

●ソチミルコ市サン・グレゴリオ地区の街角の倒壊した自宅の前で、老婦人が震災後何より切実な助けとなる慈済の現物引き換えカードを胸に抱きしめていた。

度

重なる震災は、この国の人々の警戒心が薄いからではなく、先天的な地質と後天的な気候不順のためである。

一九八五年九月十九日、メキシコ南西の海外でマグニチュード七・八の地震が発生、首都メキシコシティは大きな被害を受け、七千名の命が奪われた。それから三十二年後、二〇一七年の同月同日、政府が全国に地震防災演習を発令した数時間後の午後一時十四分、中部プエブラ州でマグニチュード七・一の地震が発生。震源から百二十キロの距離にある首都でも激しい揺れに見舞われ、大きな被害が発生した。

●2017年9月19日の地震の被災地ホフトラ市。震災後3カ月が経っても瓦礫が残り、復興への歩みは遅い。

なぜメキシコでは、これほど頻繁に地震が発生するのだろうか。

メキシコは北アメリカプレート、ココスプレート、太平洋プレートという三大地殻の交差する位置にあり、また首都が置かれたメキシコ盆地では、脆弱な地質による液化化現象が発生し、大きな被害を招きやすいのだ。

高原の国に、視察の足跡

周辺都市を含めたメキシコシティの総面積は二千八平方キロメートル、人口は二千五百万人に達し、台湾の総人口を



●メキシコの暮らしには今と昔が共存している。街角では
 グアダルupesの聖母像に先住民インディオの軽食屋、服飾
 品を売る店を目にすることができる。スペイン植民地時代
 のバロック建築が残された首都の市街地では、伝統音楽を
 演奏するマリアッチャや、靴磨きの職人もいる。一方、その
 他の都市では今でも馬を交通手段とする人々もいる。

上回る。世界最大都市の一つで、慈済が今回救援
 活動を行ったソチミルコ市とトラウアク市も同様
 である。

そのうちソチミルコ市はメキシコ渓谷の中部に
 位置し、聳え立つ火山に囲まれている。海拔は
 二千二百五十メートル。メキシコシティ全体も高
 原地形であり、当初到着したばかりの慈済人は、
 道を歩くにも息が切れた。

慈済世界ボランティア総監督黄思賢率いるア

メリカチーム一行六名が、地震から七日目の
 二〇一七年九月二十六日に被災地ソチミルコ市の
 サン・グレゴリオ地区を視察した。数えきれない
 ほどの家屋が倒壊していたが、悲惨な状況の中
 でも、多くの人々が街角で水や物資を提供し、医療
 ステーションを設置するなど、自発的な救援活動
 に取り組んでいた。

報道によると、ソチミルコ市では六名が死亡、
 七百棟以上の家屋が損壊し、二十八の道路が被害
 を受けた。慈済災害視察チームはサン・グレゴリ
 オ地区で、災害救助を指揮するエネルギー建築省
 秘書のジュリア・ベネッティに会った。彼女はこ
 の地区は人口三万人で、人々の平均月収は三百元
 （二元は約三・五円）に満たない貧困地区で、震災





後大きな困難に直面していると語った。

災害視察チームは百七十年の歴史を持つ古い教会を通りかかった。教会は地震で天井の一部が崩れ、死傷者を出したが、幸い教会の主構造は無事だったため、人々はここで祈禱や礼拝を行っているという。

見知らぬ慈済人が来たのを見て、フラインシスコ・カステラノス神父が真心を込めてこう言った。「私たちには同じ血が流れています！」。宗教は彼我を分かたず互いに助け合うべきだという意味の込められたこの言葉に、ボランティアたちは感動した。

その後、第二弾のチームがここを基

地とし、政府と民間から提供された被災者リストを元に一軒一軒訪問して、最も助けを必要とする家庭を確認した。さらに現地ボランティアの通訳で被災者とコミュニケーションを図った。アメリカから駆けつけたメキシコ系女性のリリアン・アグイラルは、慈済人と住民との距離を縮める通訳を務めるため、災害視察チームとともに引き続き現地に残ることになった。

以降、アルゼンチン、エクアドル、台湾からのスペイン語ができるボランティアが加わり、二カ月以上にわたって頻繁

に家庭訪問と再調査を行う中で、慈済は現地の住民との友好を深めた。三分の二以上の住宅が政府により違法建築と指定されているため、公的支援が受けられない「チナンパ（浮き畑）地区」でのサポートも行った。

湖床に土を埋めて陸を作る長方形の耕種方法は、古代アステカ時代の方法を踏襲したものである。かつての帝国はスぺ

●チナンパ（浮き畑）では農民たちが野菜を栽培している。ここはユネスコにより無形文化遺産に登録されており、メキシコ古代文明の証でもある。アステカ帝国時代に始まった湖上での優れたチナンパ農法は、何世紀にも渡って人々に食物を提供してきた。



インに滅ぼされたが、古い運河とチナンパは残り、ユネスコの無形文化遺産に登録されている。

チナンパ地区で、自宅が倒壊して落ち込んでいた農民のジャイメ・ペレスは、ボランティアたちの励ましを受けて元気を取り戻し、毎日自転車で被災者リストの再調査に参加し、協力している。「ここではみんながボランティアだよ。心の底から自分たちの地域のために働きたいと思っっているんだ」と彼は話す。

悲しみを力に変えた被災者は少なくない。乳母車を押して家庭訪問をしているブレンダ・ナルシソや震災後うつ

病を患ったフローラ・ガルシアもそうした被災者の一人で、彼らは続々と新しい働き手となった。配付を行う前から、慈済はソチミルコ市ですでに確固とした信頼関係を築いていたのだ。

モレロス州は災害視察チームの最初の基地であった。二〇一七年九月二十四日にメキシコに到着した黄思賢は、モレロス州ホフトラ市では建物の多くが倒壊して平地となり、数十の街の住宅と商店に甚大な被害が出たとの報道を目にした。現地は治安が悪く、マフィアが強い勢力を持っていると多くの人が警告したが、それでも彼は毅然として次の日にはチー

ムとともに出発することを決めた。

その時の災害視察では、至る所に地震の傷跡が見受けられた。ホフトラ市の街道ではあちこちに倒壊した家屋とテントがあり、被災者は屋外で夜を明かすことを余儀なくされていた。大勢のチームがやって来ても、安全や交通の問題を解決できるという見通しをつけ、黄思賢はこの重大な被災地を配付対象に組み込むことを決めた。

●サトウキビの重要な産地サカテペク市では、市政府が配付場所として25000人を収容できる国家サッカースタジアムを提供してくれた。サトウキビの葉を焼く煙が空に舞い上がる中、1500世帯以上の市民がやって来た。



●トラキルテナンゴ市での配付ではフォークダンスが披露された。ダンサーはインディオのトーテムとスペインの闘牛士をデザインした衣装に身を包んだ。

静かな生活が、地震で一変

二〇一七年十二月七日、十三の国や地域からの慈済ボランティアで組織された百人以上のチームが、トラウアック市で初の配付活動を行った。慈済人が最後に災害視察に来た都市であったにもかかわらず、同市が最初の配付の拠点となったのは、隣接するソチミルコ市の職員ジュリアの引き合わせがあったためだ。

十二月四日、台湾チームがメキシコに到着すると、アルゼンチンのボランティアア洪良岱と王颯文、さらに市役所チームの付き添いのもとトラウアック被災地を

訪問し、「配付通知書」を被災者に届けた。

地震後二カ月半を経ても、地震の傷跡は至る所に見られた。多くの家屋が倒壊を防ぐため、鉄や木の棒で家を固定していた。ある地区では通りのほとんど全ての家屋に、「要取り壊し」を示す通知書が貼られていたが、それでも住民はそこを離れず、苦労して建てた家を守り続けていた。また、路面の陥没も激しく、落差が数メートルに達するところもあった。

黄色の家に住む五十二歳の女性は、地震で家が倒壊して、家族は離れ離れとなり、自分は病気の八十歳の老母を連れて妹のもとに身を寄せ、息子や娘は親戚の

●昨年9月の地震では12000以上の学校が被害を受けた。サカテペク市の被災地のある中学校では、教師と生徒が木の下にテントを張って授業していた。設備は粗末だが、皆真剣に学んでいる。

家に身を寄せている、と泣きながら訴えた。木の棒で支えをした家屋を見つめながら、彼女は家族と一緒に暮らしていた過去に戻りたいと語った。

彼女によると、市政府は一度は住民が自宅を再建するための建材を補助すると約束したが、連邦政府はこの地区を断層帯と判定し、住民の転出を望んでいるという。ある弁護士の助けで建築の専門家による評価を行うことになり、大学もよ



り詳細な調査を行う地質チームを派遣したが、結果が出るのは八カ月後とのことだった。

帰途、地震後水と食料の供給を続けている移動食糧車を目にした。クスロヘミ・イザベルという女性が英語で話しかけてきた。彼女は、自分と別の地区に住む姉が配付通知書を受け取ったと言い、一袋のみかんを皆に分けてくれた。

同行していた大愛テレビチーフディレクターの葉樹姍が、みかんは華人にとって縁起のいい食べ物であると説明し、イザベルの幸運を祈ると、嬉しそうに笑った。

トラウアック市での配付当日、イザベルは姉と一緒にやって来た。現物引き換えカードとエコ毛布を受け取った姉妹はうれし涙を流し、「ずっと待っていたの。皆さんの慈悲と大愛を私たちは永遠に忘れません」と話した。災害視察で撮影したビデオを放映したり、慈善人の声かけにより、お年寄りは泣き、そして笑った。

涙を拭い、自分と人を救う

その後の二日間にわたるソチミルコ市での配付では、舞台の上と下で和気あいあいとした交流が生まれた。そのにぎや



●ホフトラ市の配付地点はテントの張り巡らされたリトルヒーローサッカー場だった。この老夫婦は仕事がなく、妻には持病もあった。2人は慈済の配付した現物引き換えカードと毛布を受け取って、心が暖かくなったと話した。

かな光景を目にしたアベリーノ・ランゲル市長は思わず涙をこぼした。地震発生直後、市は災害救助の不備を指摘され、市長が被災地を視察した際には市民の暴行を受けたのだ。その日の盛況を目の当たりにした市長は、「ソチミルコ市はきつと蘇ります。慈済のサポートにより苦難を脱し、人々が団結し、困難をともに乗り越えるでしょう！」と語った。

現地ボランティアのタニ・フォンセラ

「だが、證嚴法師の被災者への慰問の手紙を読み上げると、多くの人々が感動して涙を流し、マリー・アンジェリカが進み出て自分が育てたバラの花束を慈済人に手渡した。サン・グレゴリオ地区で小児科診療所を開業する彼女は、地震により住宅と診療所が全壊した。「でも私はあきらめません。再建することを発願します」

現在六十二歳のマリーは医者となつて四十年、多くの人々と触れ合ってきた。地震後物資や食べ物を人々に提供し続けた彼女は、慈済人が被災地を走り回り、人々を慰めるのを見て、慈済人は人々に

希望と温もりを与えるバラの香りのようだと感じたという。

三十二年前の大地震も経験した彼女は、今回の震災は神から与えられた試練だと直感したという。「神は人々が互いに助け合い、愛し合えるかどうか、試しておられるのです」。敬虔なカトリック信者の彼女は震災をこんな風に解釈している。また彼女は、もともと「身体の病気を治してきた自分の役割をも昇華させ、地震後には、「心の病」も癒すようになった。

地震で負傷し、苦しみと悲しみを抱えた病人は少なくない。無料診療エリア

●ホフトラ市での配付中、現場の秩序維持と安全確保に当たっていた婦人警官。最後には配付活動の列に加わり、人々を抱きしめ、自ら手渡すという暖かいコミュニケーションを体験した。

では毎日様々な場面が繰り広げられる。病人一人に多くの人がついて世話をし、中国語、英語、スペイン語が飛び交う。ある日、葉添浩医師が血糖値の上があった女性の診療をしている時、現地ボランティアのロドリゴ・ロザダが英語とスペイン語の通訳を担当した。葉添浩が慣れない英語につまった時には、双方のスムーズなコミュニケーションのため、台湾ボランティアの蕭芳芬がす

ぐにサポートした。

高原の気候は、日夜の気温差が二十度以上にも達する。ソチミルコ市での二回目の配付は、摂氏二度の気温の中行われ、数名の台湾と中国の企業家も家族を連れて手伝いに来た。メキシコ駐在台北経済文化弁事処の廖世傑代表も夫人とともに参加した。異国で多くの華人が集まり、異なる民族の人々のために協力する様は、まさに「天下一家人」の観があった。

●家族の人数に応じて受け取る現物引き換えカード。およそ現地の2カ月から6カ月の基本給に相当し、契約商店、スーパーマーケットで日用品、医療用品、再建のための建材を購入できる。使用範囲は広いが、アルコール商品は購入できない。



震災の傷を、愛で癒す

モレロス州での配付は計四回、トラキルテナンゴ市とサカタペク市で一回ずつ、ホフトラ市で二回行った。六千世帯近い人々に対応するため、メキシコシティの多くのボランティアが南下して支援した。中でもソチミルコ市のトリニダード・ジャルディネスは最大規模の十数人を引き連れてやって来た。

配付実施の前夜、災害救助診療ボランティアチームは事前にホフトラ市の被害状況を見て回った。地震後すぐに救援に加わったデービッド・グティエレスが詳

ば、言葉は必要なかった。

配付中には無料診療も拡大して実施した。台湾チームは台中慈済病院の簡守信院長と台北慈済病院の趙有誠院長がチームを率いた。アメリカチーム二十余名はアメリカ医療基金会の葛済捨執行長が率い、このほかにもアルゼンチンなどから医師十名、東洋医、歯科医四名、脊椎科、理学療法士、看護師などからなる大規模な医療チームを結成し、体育館や草地に張ったテントで、熱心に医療サービスを

●東洋医の針灸治療は針を何本か刺すだけで痛みが取れると現地の人々に好評だった。肉体労働者にはとくに助けとなり、ひっきりなしに人々が診療に訪れた。

しい被害状況を説明した。道沿いには多くの倒壊した家屋がそのまま残されており、テントが至る所に張られ、多くの商店が廃墟となっていたが、治安の悪さは少しも感じなかった。かえって耳にするのは、市民の情熱的な歓声であった。

配付が始まった後、審査エリアで慈済の理念や現物引き換えカードの使い方を説明している時や心理面でのケアサポートを行っている時、言葉が通じなくても、被災者たちは自分からボランティアと握手したり、ボランティアを抱きしめたりした。ボランティアから深い愛を感じ取った被災者に対しては、笑顔さえあれ





●無料診療エリアでは各国の医師がスペイン語に通じたボランティアを介して問診を行う。人々に思いのたけを述べてもらうことで地震後のストレスを和らげ、病とともに心も癒した。提供した。

毎朝早く、診療が開始する前から、多くの人々が列をなして待っていた。ホフトラ市での診療中、大林慈濟病院救急医療部の李宜恭主任は、突発的な胸の痛みを訴えた男性を、急性心筋梗塞と診断、ただちに現地ボランティアに救急車を呼ぶよう指示し、病院へ搬送してもらった。これにより男性は一命を取り留めた。

高血圧、糖尿病、腎臓病が現地でも最もよく見られる慢性疾患だった。また歯科

医も多くの虫歯や歯痛を治療した。アメリカの歯科医、廖敬興が、これは現地の人が甘い物を好むことと関係があるかもしれないと言うと、彼のそばで学んでいた現地の医師アナ・マーティンもそれに同意した。

会場では、肩や腕の痛みを訴えて診療にやって来る人が少なくなかった。東洋医や理学療法士は休む暇もないほどであったが、皆充実感を覚えていた。

現地のカウンセラーであるエロイーザ・ヘルナンデスは、地震後多くの人が苦しみ続けていると話す。とくに家族を失った人は、彼女の前で泣きわめいたり、

ヒステリックになったり、強い不安を訴えたり、精神的に不安定だと言う。大声で泣きわめいて悲しみを外に表すことは、心の中のため込むよりいいことだと、彼女は言い、彼らの悲しみを発散させるため、多くを語らず、じつと話に耳を傾ける。

病人が十分に泣いた後、彼女は慰めるとともに、なるべく薬物に頼らず、別の物事に彼らの注意を逸らす。無料診療の日、あるおばあさんが来て、地震の際、九歳の孫を守って、頭や肩に怪我をしたが、幸い重症ではなかったと語った。彼女がじつとおばあさんの話を聞くうち



かけるのだという。

地震後すでに三カ月近くが経つが、被災地では大地震がまた発生するという噂が飛び交い、人々を不安にしていると彼は話す。噂を信じて屋内に入らず、寒空の下テントで暮らす人もいるという。

慈済ボランティアが被災地に入った当初、メキシコ人は彼らに対する警戒心や、外国の団体への不信感があったが、二カ月余りに及ぶ家庭訪問や交流を経て、十回の配付活動は無事に終了した。配付会場ではいつも、音楽に合わせてダンスする被災者たちの姿が見られた。

「泣かないで、歌おう！ 美しい空が私たちの心を暖めてくれる……」。皆と

●ソチミルコ市での配付会場では、メキシコの人々が情熱的に感謝の気持ちを表した。マリイは式典が終わるのを待ちきれずに、舞台へ上がってバラの花を慈済人に渡した。慈済人がバラと同じように希望と温もりをもたらしてくれたことに感謝した。

に、おばあさんは気分が晴れたようで、彼女がくれたミルクティーを嬉しそうに飲み、笑みを浮かべて帰って行った。

ホフトラ市の配付会場で、私は公立診療所家庭医療科医師のペドロのこんな話を耳にした。可愛がっていた姪が地震で亡くなった後、彼は同じくらいの年齢の子どもの患者を診るたび、まるで自分の心の傷を癒すかのように、優しい言葉を

一緒に民間版の国歌「美しい空」を歌っていたサカテペク市長フランシスコ・サリナスは、曲が「愛と思いやり」に変わると、被災地視察の際の状況を思い出したのか、思わず涙をこぼした。人と人との間も、悲喜こもごもの中で睦まじく一体となったようだった。

メキシコ人は粘り強い。「蛇をくわえた鷲」の国章が、それを象徴している。

被災した人々が粘り強い心で、万難を克服し、祖先の精神を引き継ぎ、負けない心を持って勇敢に困難を乗り越え、真に「美しい空」を迎えられる日が来ることを心から祈っている。

(慈済月刊六一五期より)



希望は倒れない

◎文・ロドリゴ・ペレス・ロザダ 訳・張漢生&惟明 撮影・黄筱哲

悲劇が我々に思い出させるのは互いに信頼することの重要さだ。最も大切なのは「希望」を持ち続けること。

二〇一七年九月十九日午後、メキシコの首都メキシコシティを強い地震が襲った。同市の大聖堂の正面屋上には「自信」「希望」「慈善」と名付けられた三つの彫刻像が飾られているが、そのうち「希望」の像が倒れた。だが、これは凶兆ではなかった。メキシコ市民は彼らが持つ「団

結」の真の価値観を世界に見せつけたのだ。倒壊した建物の現場では、一般市民が消防隊など救援部隊に早変わりし、兵士が建築作業に参加した。数十万のメキシコ市民が政府ができなかった救援活動を成し遂げたのだった。

最も記念すべき民間活動は、三十二



年前の同じ日に起きたメキシコシティ大地震かもしれない。この地震は三十万人の家を倒壊させた。メキシコ人作家のカルロス・フェンテスが、この日を「公民社会が自己の持っている力を明瞭に理解した日」にしようと呼びかけている。悲劇は我々に互いに信頼し合えることを思い出させた。私は当時まだ七歳だったので、近年

●カトリックが主な信仰宗教であるメキシコ。その首都にある大聖堂の「希望」を意味する女神像が地震で倒れた。大聖堂の屋上は修繕のため鉄のフレームに囲まれている。

になって保存された当時の資料を読んで初めて、多くのヒーローの事績を知った。私が今回自発的に手伝いにきた主な原因は、当時の善行の数々を知っていたからである。

人々は時としてこの大切な価値観を忘れてしまう。個人主義の闇の中にも、問題が自ら消えたり、他人が解決してくれたりするよう期待しがちになる。私はかつて六年間、メキシコから遠く離れたカナダに住み、メキシコの現実について考える時間を多く持つことができた。異国に移住した私は、初めて祖国の文化と離れたという感覚を経験し、遠くから自

らのルーツを尊重する気持ちを培い、祖国に対する愛を表現する方法を見つけた。

古代のメキシコ人は約束を必ず守り、言ったことは必ず実行する。カナダで私は互いに尊重することを学び、それが衝突を解決するための鍵であると悟った。今の私は、この二つの国を故郷と思い、誇りに思っている。

地震を正視し、
能力の限り社会を良くしていく

多くの人はなぜメキシコシティのよう

な大都市が湖の上に建てられたのか不思議に思うだろう。十四世紀のアステカ人、

すなわち古代メキシコ人がテスココ湖に城を築いた時にも、ここが後に二千万の人口を超える大都会になるとは思わなかったはずだ。

古代メキシコ人は大自然を畏怖し、なすことすべてが大自然とバランスをとれるように考えていた。あらゆる困難を克服した末、水上の建築工法を確立した。惜しいことに、今となってはソチミルコ運河以外のものはすべて伝説になった。ソチミルコでチナンパ農法を使って耕作している住民も、隣接の都会が急速に拡

大している中、生き残りをかけて懸命にもがいている。

今回の地震はまぎれもなくひとつの警報だ。我々は長い間、湖を埋め立てて生活していながら、環境保護のために何か備えてきたのか？ メキシコの文学者、

カルロス・フェンテスは二十世紀、ここを「空気が最も新鮮な場所」と称した。初めて古城を訪れた人たちはその美しさを愛でることができた。しかし、湖に流れ込んでいた川が今では下水管に変わり、下水がどのように湖に汚染をもたらしたかは見えない。我々は、今回の地震を正視する必要がある。最善策は、我々



●ロドリゴは、救援活動に加わった時に撮った被災状況のビデオを見せた。写真芸術の創作に従事する彼は、人間が環境保護のために何かしていたかを反省し、人間と大自然がバランスをとるべきだと話す。

が力を尽くして社会を良く変えていくこととであり、祖父母達から伝わる言葉のように、街の中に存在していた寛大を旨とする精神を再び見つけるべきだ。

ボランティアの精神、
無私と真心の奉仕

地震後、慈済のボランティアに出会う

一週間前から、私は倒壊した建物の瓦礫を運び出す手伝いをしていたのだが、灰をたくさん吸い込んだせいで病気になった。それでも屋外に出て救援活動に協力することを決心した。なぜなら、サンゴディア地区の住民達が地震のせいで弱気になってしまったのを見たからだ。私の見方は正しかったと後になって証明された。「最後までこの住民に付き添うのか？」と私は自問した。なぜなら、これは真剣に取り組まねばならない「タスク」であり、無我無私、全身全霊で打ち込む強い意思が求められるからだ。

私にとって、ボランティアは今回が初

めての体験ではなかった。私は十二年間顧問を兼任しながら教鞭をとった末、ひどい鬱病にかかり教職をやめた。その後、十歳以下の子供を専門に治療するがんセンターの教師に転職した。私が教えたのは、運よく闘病生活を生き抜き、エネルギーに溢れた子供達だった。彼らの生きることへの執念は忘れがたく、自分が彼らに教えたよりも多くのことを子供達から教わった。あのような経験ができたことにとっても感謝している。

私にとって、今回慈済基金会に同行した経験が人生の大事な一部になった。これほど人道援助に深く関与したのは初め



●ロドリゴ・ペレス・ロザダ (Rodrigo Pérez Lozada)
1979年メキシコに生まれる。芸術家。メキシコシティ在住。
逸早く救援活動に参加し、地震後4カ所の被災地へ赴いた。2017年
10月より慈済救援チームに同行し、訪問ケアや救援物資の配付に参加
した。

てだ。私は初め、遙か遠くの被災地のサンゴディアやソチミルコで、仏教団体が何をするつもりかを知りたいとの好奇心が強かった。

時間が一日一日経つにつれ、共に活動する慈済ボランティアの包逸涵、何郁郁、そして呂宗翰が、久しぶりに会った旧友のように思えて来た。彼らはその情熱と真心のこもった行動で、慈済が本気で被災者を助けようとする団体であることを、私にはつきりと理解させた。私は慈

済に協力できることを嬉しく思い、慈済がいたからこそ私が人助けに専念できたのだと思った。

奉仕の精神 止まること無く

メキシコシティに生まれたにもかかわらず、地震が発生するまで私にとってソチミルコはずっと謎に満ちた街だった。古い運河は依然存在し、その住民はライオンのように伝統と信仰を守り、今で



も住民達は道で互いに挨拶している。しかし、どうやってサンゴディアへ救援しに行くかが一つのチャレンジだった。なぜなら私も台湾からきた人と同じように外来者だと彼らは思っていたからだ。言葉の問題ではなく、まずはいかに住民の信頼を勝ち取るかがチャレンジだったのだ。私にとって意外だったのが、慈済のボランティアが優しさと親切な態度で住民を感動させ、彼らの信頼を勝ち取ったことだった。私も感動した者のうちの一人だった。

その一方、被害のケースが次から次へと明らかになってきた。犠牲者の追悼に

追われ、それが私の力の源泉になった。かりに人の命を廃墟から救出できなくても、私はそばで彼らを励ますことができずかもしれない。そう思い、私が犠牲者の家を通りかかるたびにその場所を記憶し、彼らの親戚と友人が援助を得られるように力を尽くした。

人が地震後の不安におののくのを無視して、己だけが元の生活に戻ることではできなかった。彼らが不安と恐れから弱音を吐いたり、地震の時何があったかなどを話すのを、ただじっと聞いていた。彼らが必要としていたのはそういう聞き手だったからだ。震災後の

最初の何日間かは、私はそうやって街に出て見知らぬ人と話をした。ここは最も私が足を止めるべき場所だった。友人のようにその人の生活に入り込むことで、彼らの体験を深く理解することができるところを学んだ。

慈済のボランティアは真の愛を差し出していった。私は彼らから多くのことを学んだ。その中で最も大切なのは、「人のために」とい

●崩壊した古い教会の前に、ボランティアは犠牲者のために黙禱し、人々の幸福を祈るために敬虔に鐘を鳴らす。

うボランティア精神だった。私にとってこれは大きなカルチャーショックだった。ボランティアは人の世話をし、そのニーズを汲みとって、全身全霊でそれを満たした。奉仕の歩みは一刻も止まらなかった。メキシコ人として、慈済ボランティアとして、私は慈済ボランティアのユニフォームを脱いだ今でも、このことをずっと覚えている。

心を一つにすれば
再建の道は遠くない

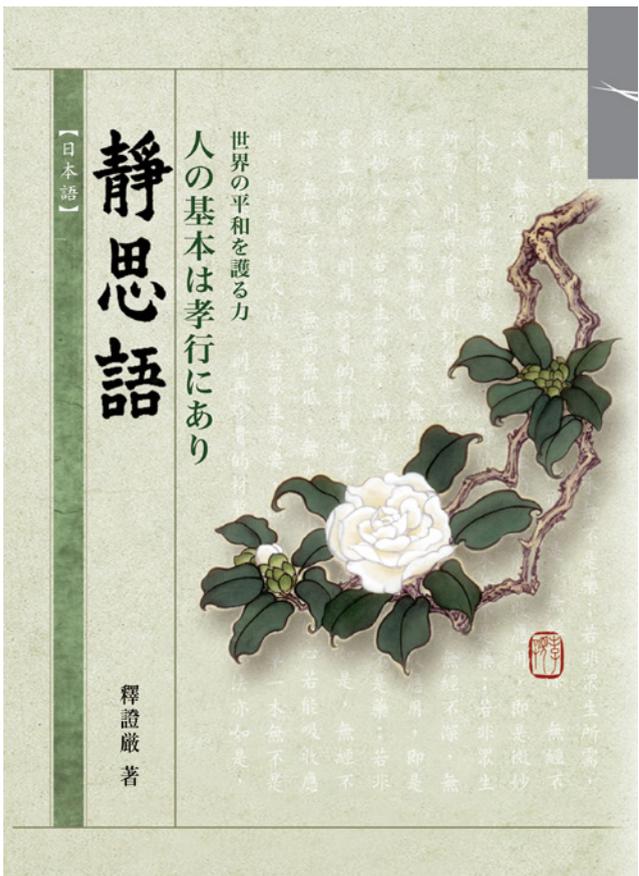
地震が発生した後、ボランティア活動

に参加したことは、一市民として最低限のことをしただけだ。善が目的だと知っていたら、皆は自発的に人助けをする。周りに感謝したいことはたくさんあった。そのような美しい思い出を大切にしたい。私も台湾とメキシコにいる仲間たちが希望を持つことの大切さを忘れないよう願っている。

大聖堂の「希望」の像はいつか修復されるだろう。私の住んでいる街も同じだ。今日から、我々は肩を並べて一緒に未来のために努力するのみである。

(慈済月刊六一五期より)

【静思語】 人の基本は孝行にあり



序の抜粋

孝行する心は真の幸福、 世界の平和は最も喜ばしいこと

釈迦は二千六百年ほど前、未来の世界が五濁悪世になり、四大元素が変調して様々な災害が起きると予言しました。釈迦が予言した未来とは現代のことであり、今、正に五濁悪世なのです。今の世界は正に仏陀が予言したように、広い範囲のものでは水害、火

災、風害、そして、小さいものでは飢饉や伝染病、戦争などであり、どの災いも起きて世界も重大ニュースにならないものはないものではなく、国から国へ波及し、人々は辛酸を舐めています。

私は「一人による一人の菩薩」運動を推進したいのです。それは、一人ひとりが人に影響を与えることで、同級生や仕事場の同僚、友人など身近な人に悟りを開かせることです。そして、一歩踏み込んで「一日に一人の菩薩」即ち、毎日、一人の人を済度するのです。わずかな愛でも尽きることがなければ、人心浄化の力は増していきます。そうして初めて五濁悪世の末法の時代で志を持った人が集結し、仏法を広める精神を啓発すると共に、この世に仏法を広めることができるのです。急がなければ間に合わなくなるでしょう。

人々に愛の心を植え付けるのはとても難しいことです。平穩無

事な国の人は、災いに遭った人たちの苦しみを理解できません。それが心配なのです。天国では福を作る機会がないため、仏は出現せず、そこで福を使い果たせば、また六道に落ちる、と釈迦は教えています。仏法が正法であることを理解していれば、幸福な人生であつても智慧を成長させ、平穏な時に愛を奉仕することで他人の苦を身で以て理解し、愛で以て解脱させることができます。このような人こそが智慧のある人なのです。

人や地域、国が互いに助け合い、平穏に暮らしている人が他人を助け、直ちに愛を奉仕して相手の役に立ったことが分かれば、私たちは気が楽になると共に自在になり、喜びを感じます。どこでも人と友人や家族のように仲良くなれば、それは心温まる美しい世界ではないでしょうか。

人は皆、愛と純真な心を持っています。その純粹で大らかな愛の力を発揮し、感謝の気持ちで菩薩道を歩めば、行く先々で蓮の花が咲き、清らかな世界になるでしょう。その清らかな流れを人々の心に根付かせ、法水によって心が潤い、喜びが生まれれば、美しい世の中になるはずです。愛のエネルギーは実に素晴らしく、愛がこの世に存在しているのを目にします。実にめでたいことです。

人の本性は「孝」にあり、孝行ができることは幸せなことです。一人ひとりの善なる孝行から始めて、少しずつその輪を広げていきましよう。規模の小さな家庭から大家族に至るまで孝行し、自分を愛すると共に他人をも愛し、大自然を大切にすれば、万物は共存し、世の中の全てが順調になり、平和で災難のない世界になるでしょう。

第一卷

人の基本

—— 孝行は人の基本、
そこから道徳は生まれる

親孝行するのはしごく当然のことであり、自分の健康と日常の礼儀作法を守り、自愛して恩に報いるのです。自愛してこそ他人を愛し、社会に奉仕することができ、それが感謝の表れなのです。自愛と報恩、感謝があれば、最も有意義な人生だと言えます。

第一章

◎ 孝行心を育む

両親の縁によって、この世に生まれた

過去世で両親と縁を結び、今世、両親の縁でこの世にやってきたのです。故に親孝行するのは人の子としての本分です。

孝行心がある家庭は繁栄する

孝行は家庭の根本です。それが無い家庭は繁栄しません。根のない木のように、枝も葉も伸びません。



間に合う

善行と親孝行は直ちに実行に移すべきであり、待ってはいけません。

第二章

◎善性を護る

真善美の人生

純粹で善良な「孝」は「真」であり、奉仕の実践が「善」、そして、それらが一つになって「美」しい人生を作り出します。

自殺の三つの罪業

自殺することで犯す罪業は三つあります。

- 一、両親から貰い受けた体を殺害することによる親不孝の罪。
- 二、自分を殺す罪業。
- 三、両親、伴侶、子どもを遺棄する罪

世の中に奉仕し、大「孝」を尽くす

孝行心の表現は特定の時節に贈り物をするものではありません。大孝を尽くして世の中に奉仕すれば、親は常に嬉しく、子供を光栄に思うでしょう。



遅咲き天使の朝山礼拝

自分に問いかける。無料診療以外に、この遅咲きの天使たちのために何かできることはないだろうか？

その時の自分に答えは出せず、ただずっと心に引っかかっていた。子供達から「いつか朝山礼拝らいはい（念仏を唱えながら三步一拝で本堂まで拝する）に行けるだろうか」と聞かれるまでは……。

中部慈済人医会は長期にわたり南投特別支援教養院で無料診療を行ってきた。あの時、二組の双子の生徒がいることを知って、とても驚き、気になった。先生の話では、

学校には四組の双子がいるそうだ。彼らの両親の苦悩を思うと忍びない。

三カ月に一度の無料診療では、歯垢、歯石の除去を主に行う。内科検診もあ

る。だが、ほかにできることはないだろうか？

その時は答えを思いつかなかったが、ずっと考え続けていた。

毎日の礼拝で善念が生じる

二〇一六年の端午節の直前、私たちは五百二十個の野菜チマキを作って先生と生徒に贈り、一緒に節句を祝った。子供達は慈済人に会おうといつも尋ねる。「次のお参りはいつですか?」。彼らはもう三年連続で慈済灌仏会に参加しており、式典も礼拝も「お参り」だと思っているようだ。

院長の林芳珥さんと秘書の杜耀星さん、そして多くの先生方と話し合った末、私たちは共通の認識に至った。子供達のため院内に仏堂を作りたい、ということだ。そうすれば彼らは毎日お参りができるのだから。

同年八月八日、名誉理事のサポートで、南投特別支援教養院の仏堂が完成した。それから毎日、子供達は自発的に仏堂でお参りをしている。まず校長室で小銭を受け取り、礼をして願いごとを唱え、竹の貯金箱に小銭を入れる。小さな善が大きな善を支えることを知っているからだ。そして最も多くお参りをした生徒は



病で苦しまないようにと願う

私は二〇一〇年に慈濟委員となったが、初めて朝山礼拝らいはいをしたのは二〇一七年四月十六日である。花蓮の静思精舎を訪れ、師匠の説明を聞いた時、私はやっとその意義が理解できた。朝山礼拝らいはいとは巡礼し懺悔することであり、善知識と共に一歩一歩進みながら成仏を目指して、仏の領域に近づくことなのだ。

大愛テレビのニュースでその様子を見た子供達は、私に花蓮へ連れて行ってくれないかと尋ねた。その時、私の心が再び動き出した。この「遅咲きの天使たち」

●「頭のどこが痛い?」「吐き気はありますか?」南投特別支援教養院で慈濟の無料診療に参加した洪啓芬医師が問診を行う。奥さんの陳美恵も生徒に付き添う。(撮影・陳建昌)

順に「班長」「副班長」と呼ばれるようになった。

学校の関係者が私に教えてくれた。生徒の中で誰かの具合が悪くなったり入院した時は、校長自らがほかの生徒と一緒に仏堂へ来て回復を祈るのだそうだ。院長は、仏堂ができてから生徒は変わっていった、争いごとが少なくなっただし、かんしゃくもあまり起こさないと、素直になってきた、と話す。

にも同じことができるのではないだろうか、と。

今年はあらゆる慈濟集会所で読書会や「国際大愛、人々の絆を願う」をテーマとした音楽会が開かれ、「東方瑠璃薬師仏大願」を学習している。私はその中の「第六大願」を思い出していた。来世で悟りを得ることを願う。諸々の衆生のその身は生まれながらに眼、耳、鼻、舌、手足が不完全であり、愚かで道理を知らぬ上に不自由に苦しみ、不治の病や難病をかかえている。仏法の智慧を学び、悟りに至れば、皆すべてが完全となり、苦しみはなくなる、という教えだ。そうだ、



彼ら連れて花蓮へ行こう、彼らの来世が病苦のないものであるよう祈願しよう、と考えた。

南投特別支援学校の先生方は毎年二度、生徒を連れて旅行をする。私たちは院長と先生方と話し合い、八月に花蓮に行くことを計画した。そして静思精舎への朝山礼拝らいはいを体験させることにした。

私たちが精舎の師匠に提案すると、その頃の花蓮は熱さが厳しく、気温が三十五度を越えるだろうから、子供達が耐えられるだろうかと心配してくださった。しかし、院長はじめ先生方は大丈夫だと考えていた。

それで計画通り実行することにし、

二十名の先生方と六十六名の生徒が八月五日花蓮に到着した。翌日から朝山礼拝らいはいを行うことになっていた。気温は高くなるという予報が出ていたので、私も熱中症を心配したが、夜八時に慈済基金会宗教処から連絡があり、證嚴法師のお言葉が伝えられた。「皆さんの生徒たちは良い子で純粹ですから、暑さにも負けないことでしょう、皆さんが気をつけてあげてください」。宗教処でも場所を整えているという。私もそう聞いて安心し、法師のお気遣いに深く感謝した。

八月六日午前、ボランティア十名に伴

われて精舎に入った。師匠と宗教処の方々の出迎えを受け、朝山礼拝らいはいの意義と作法の説明を聞き、「慈悲の広場」から礼拝らいはいを開始した。

師匠は念仏を唱えながら私たちを導いて下さった。三步進んでひざまずき、ゆっくりと本堂の外回廊を前進する。汗が私の眼鏡と目頭にしみてくる。子供達を振り返ることはしなかったが、私にはみんなが同じ動作をしていることが分かっていった。ひざまずいて改めて懺悔し

●南投県草屯の慈済ボランティアは2017年の初め、南投特別支援教養院で「世界菜食の日」を記念し、野菜のコスプレで楽しく菜食の指導を行った。(撮影・簡宏正)



に、「良いことを話し、前向きに考え、善い行いをするように」と励ましていた。だいたことが忘れられない。

昼食の後、みんなは再度本堂に集合し、災難のない世の中になるよう祈った。そして大型バスで次の目的地を目指した。

みんなを見送りながら、私の心は感動と法喜に満たされていた。心から彼らの来世が障害のないものであることを祈りたい。また、花蓮の精舎にある師匠と宗教処の皆さんの準備に深く感謝したい。皆さんの協力のおかげで遅咲きの天使たちは朝山礼拝らいはいという願いを叶えることができたのだから。

● 静思精舎で朝山礼拝をした後、徳善師父の話を聞く生徒達（写真提供・洪啓芬）

ているのだ。これまでの良くない行為を悔い改め、心を清めることで、さらに仏に近づけるように……。

みんなが一步一步進み、本堂を目指す。成仏への道程に入って、成仏の境地にたどり着けるように。やがて入り口に着了いたので、体を起こし、問訊（仏教の礼法で、合掌して頭を下げておじぎをすること）をして本堂に入った。それから徳善師匠の開示を聞き、会議室で徳善師匠の話聞いたのだが、子供達のために分かりやすい言葉で話してくださった。とく

護念 行者を見守る菩薩の心

◎ 文・林芳瑀（南投特別支援教養院院長）
訳・黒川章子

二〇一三年より慈濟ボランティアの皆さんの温かい計らいにより、教養院の良子（知的障害者）たちは毎年「灌仏会」「七月吉祥月祈福会」「歳末祝福式典」に参加し、踊りと手話パフォーマンスを披露するという縁を結んでいただいています。ボランティアの皆さんのご支援により、院内に仏堂が完備され、より多くのイベントを行うことができるようになると、子供達は、花蓮へ行き證嚴法師にお会いしたいという夢を持つようになりました。

そして、洪啓芬医師と陳美恵さんのご協力により、私たちはついに自動車、汽車、新幹線を乗継ぎ、その夢の旅路につくことになったのです。子供達にとって「朝山礼拝」は何にもまして期待と喜びに満ちたお参りでした。炎天下の中でひざまずく動作は大変でしたが、子供達の顔が曇ることはありませんでした。きっと、彼らの心が「広く純粹である」からでしょう！

子供達の動作はゆっくりで、乱れたり、礼儀知らずなところもありましたが、熱心に学び、努力し、汗を流しながらすべての動作を終えることができました。師匠の方々に忍耐強く指導していただき、また、草屯のボランティアの方々に全力で見守っていただいたおかげで、遅咲きの天使たちの夢は叶ったのでした。

帰りの汽車の中で、子供たちは何度も師匠のお話を繰り返していました。「良いことを話し、前向きに考え、善い行いをする」と教えてくださった法師様や師匠様、そしてボランティアの皆さんには心から感謝を申し上げたいと思います。子供達に善の種を蒔いていただきました。生きてゆく意味を見い出すことができた彼らは、この上ない幸せを感じることができました。

円満 完璧で完全な結末

◎文・杜耀星（南投特別支援教養院秘書） 訳・黒川章子

静思精舎に行つて朝山礼拝ができることを、「遅咲きの天使」たちはどれほど楽しみにし、喜んだことでしょう。出発の一カ月前、院長は私にこう言いました。「朝山礼拝に行きたいのです。テレビでいつも見ている證嚴法師にお会いし、静思精舎を訪ねてみたいのです」。それはまさしく私と子供達の願いでもありました。

静思精舎に着くと、ボランティアの皆さんに導かれ、子供達は靴を脱いで靴袋に入れて膝あてをつけていましたが、その日はとくに暑い日でした。この日のスケジュールを続けるべきかどうか考えていると、師匠が到着され、礼拝が始まりました。読経の中、三步進んで一度ひざまずくことを繰り返し、全員大殿へ戻ることができました。この場を借りて、證嚴法師と師匠、そしてボランティアの皆さんの庇護のもとで、子供達が無事に礼拝を成し遂げたことに、心から感謝を申し上げます。皆様にも祝福がありますように！

お兄さんがんばって！

◎文・簡慧玲（南投特別支援教養院関係者） 訳・黒川章子

「合兄さんが病気になるって！ 頑張って！」。八月六日、朝山礼拝らいはいのグループで潔ちゃんは繰り返しこうつぶやいていた。潔ちゃんと合くんの兄妹は教養院で暮らしている。潔ちゃんは静思精舎の師匠が念仏を唱える声を注意深く聞き、自分もひざまずいてつぶやき、心の中ではこう唱えていた。

二〇一七年七月二十二日、兄の合くんは脳内出血を起こして昏睡状態となり、集中治療室にいた。八月十日、合兄さんは呼吸器をつけていたが眼は見開いていたので、潔ちゃんは嬉しそうに声をかけた。「お兄さん頑張ってね！ こっちを見て！」。そして、朝山礼拝らいはいに参加すると決まってから買い求めた小象のキーホルダーを合くんの手に握らせて言った。「一緒にいるからね、祈ってるからね」

教養院のスタッフは自発的に「子供達の安全を祈り、百人で十五日間ベジタリアンになる」と決めていた。そして参加人数はすぐに百人を超えた。八月二十三日、合くんの呼吸器が外された。私たちは合くんに言った。「ありがとう。君のおかげで院内の人たちはベジタリアンの心がけを持つようになったよ」八月二十九日正午、ボランティアの方々で院で愛を広めるイベントを行った。先生と生徒四百人近くが一緒にベジタリアンとなって参加したのだが、その夜、病院から合くんが一般病棟に移ったという連絡があった。よかった。神様、感謝します！ 私たちの心の声を聞いてくださってありがとうございます！

健康の玉手箱

◎文・伍弁苓 訳・明陸 撮影・陳輝明

母の得意な混ぜご飯

母が料理を作るときは目が生き生きしていますが、歩く時足元がおぼつかないので、なるべく料理を作らせたくありませんでした。

しかし、混ぜご飯は母の得意な料理の一つです。

栗とシイタケのご飯に、山芋と百合根と筍菜の混ぜご飯、

松の実とほうれん草のご飯など……

母のような高齢者でも手軽に作れる栄養価値の高い、油と塩分の少ない料理です。

母

が私の家にしばらく住んでいる間、母の食事は私が準備をしていました。でも、母が自分の家が恋しくなると帰ったら、自分で食事を用意しなければなりません。ある日、母は電話で私に聞きました。「あの日、あなたが作った混ぜご飯の食材は栗とシイタケと、ほかに何を入れていたの。私はもう忘れてしまったわ」と。

私は親孝行の子供たちを見たことがありませんでした。その子供たちは老いた親に何もさせずに、エビの殻までも剥いてから食べさせていました。私はというと、母の世話をしているとき毎日母の健康状態

をみて体を動かさせています。

母の体には衰えが見られ、歩き方が遅くなり、ぞうきんをかたく絞れないこともありますが、包丁で野菜を切るときやゴボウを削るときの動作は私よりも何倍も速いです。

母が料理を作る時は目が輝いているので、たとえ少しのふらつきがあっても、私たちは気にせず一緒に食材を準備します。母が長い時間立っていられない時は、テーブルの前に座らせて、野菜を選別してもらいます。

母が家へ帰る前、もしも調理方法を変えて、煮込み鍋にすれば、昼と夜にも食

べられるので楽になるね、と二人で言いました。

市場で新鮮な栗を見かけると買い求め、母が好きなので何度も作りました。新鮮な栗は自然の甘味があつて美味しいと褒めてくれたので、もう一度作る自信が出ました。

新鮮な食材で自由に変化

あまり長い間立っていると、お年寄りには背中や膝関節が痛くなるので、素早く作れるこの料理が最適です。

栗とシイタケのご飯以外に、私は母の

好きな食材を選んで、健康状態に合わせて混ぜご飯のレシピを作りました。「山芋と百合根と兎菜の混ぜご飯」や「トマトとひよこ豆と栗のご飯」や「カーネルコーンご飯」、「松の実とほうれん草のご



栗シイタケご飯

1. 干しシイタケを水に浸しておく。栗を5分間湯がいて取り出した後、皮を剥く（栗は冷たくなると剥きにくくなる）
2. 米を洗い、にんじんを角切りにして加え、栗とシイタケ、適量のだし、少量の塩と一緒に炊飯器に入れて、普通のご飯の分量の水で炊けば出来上がり。



飯」や「かぼちゃとカシューナッツのご飯」、「ごぼうとコーンとくるみのご飯」などです。母の側にいないとき、一回で二食分を作れると楽ですし、また、栄養価値の高い、油と塩分を控えた混ぜご飯は、野菜そのものの甘味があり、調味料を使う必要がなく、塩分を取り過ぎないので体の負担になりません。

私が一度友人の家を訪ねた時、台所が立派なので私は羨ましく思いました。でも、友人は惜しいことにあまり使っておらず、いつもレストランで食事をして、台所ではお湯を沸かすだけでした。

友人は、「あなたはご飯を作る時間が

あってうらやましいわ。私は毎日忙しくて二時間で三品のおかずとスープなんて作れないわ」と言いました。

私は頭をふって、「私たちにとって必要なものはそんなに多くないわ。私たちはもう不惑の年だから、もしもこれまでのように肉類の多い一汁三菜の食事をしていたら、贅肉がつくのは当たり前ですよ」と言いました。毎日肉類のおかず三品とスープでは、肉類が多過ぎですから、太らないわけがありません。

私が母のために混ぜご飯を作っていると、友人に話すと、「こんなメニューではあまりにも簡単ではないですか？」と

友人が驚きました。「私のような平凡な家庭で普通の生活を送る者に、豪華なコース料理を作る必要があるかしら？ それとも、料理コンテストに参加するの？」と私が答えると、友人と二人で大笑いしました。

私たち一家三人が菜食に変えてからもう八年になります。時にはレストランでおいしい食べものを食べることもあります。しかし、大部分の時間は家族の健康のために自分で料理を作ります。少しも面倒ではなく簡単ですが、栄養は満点です。

（慈濟月刊六一四期より）



善を施し 善を行い 善を教える

◎ 訳・慈願 絵・林建宏

全身全霊を尽くして
人を助けましょう
良い言葉で人々を利し
信心が増すよう励ましましょう
互いに称賛して成就するよう
皆で善行しましょう。

南米のベネズエラは政治も経済も乱れ、治安は日増しに悪化しています。また、ひどいインフレのために、国民は長期的に民生品が欠乏して生活が苦しく、毎日のように人々は外国に逃れています。隣国のブラジルが、ベネズエラ難民に食事を提供するなどの人道援助を行っています。野宿しながら労働許可証の交付を待つ難民は、生活が続けません。難民の数は増える一方で、ブラジル政府はプレッシャーを感じています。

ある難民の夫婦は、妻が教師で夫はリハビリ療法士と、二人共専門職従事者ですが、二人の給料を合わせても一

ダースの卵も買うことができず、とても生活ができません。結局、子供を連れてチリに逃れました。親しい友人に頼るつもりでしたが、友人も彼らを受け入れる余力がなく、家を借りることにしました。借りた家の中には家具は何もありません。この惨状を目にした家主が、彼らに代わって慈済のケアグループに連絡したのです。

訪問したボランティアは、中古の家具と衣類、マットレス、炊事用具、生活用品などを贈りました。面識もない慈済ボランティアに至れり尽くせり助けてもらって大変感謝している、と奥さんが言いました。

経済的な混乱のためにせよ、戦火のためにせよ、生まれ故郷を追われることはとても辛いことです。時には少数の人の心が偏っているために、尽きない貪欲と絶えない悪念が生じます。これが多くの人に悪影響を与え、社会や国家は不安定になってしまふのです。

社会が安定を保つことは容易なことではありません。苦を見て幸せを知り、安定した社会で私たちが安穩に生活できることを、常に感謝し、お互いに感謝し合うべきです。福を知って大切に、それを維持し、人と互いに交流して愛を届け、共に幸せな社会を創らな

ければなりません。

心の持ち様を変えて、
生態を保護する
大地が健やかであれば、
人類は平和に暮らせる

社会が祥和息災であることを願うなら、一人ひとりが自分から始めるべきです。中国福建省福鼎管陽鎮の西昆村は孔子の末裔が住む村で、古の伝統文化が残っています。二〇一七年八月、慈済ボランティアは環境保全の理念をこの西昆村に広め、古い家を修繕して

環境保全センターにし、村民に資源回収を呼びかけました。

環境保全について説明した時、住民は家にある様々な椅子を持ち出してきて、まるで一昔前に村人が映画でも見るような様子で、ボランティアの環境保全の理念に耳を傾けていました。

村の共産党書記を務める孔慶平さんはすぐに聞き入れ、正しいことなら実践すべきだと思いました。「正しいことは自分、我が家、我が村から始めよう」と村人に呼びかけました。村の四十年代が呼応し、「源から清くしよう」という観念を広め、「ゴミが黄金に変わり、黄金が愛の心になる」ことを行動に

移しました。

彼らは一軒一軒回って、「お宅に黄金（リサイクル用のゴミ）がありましたら出して下さい」とリサイクルを呼びかけました。孔さんは自費でリサイクル用のゴミ箱を購入して、一戸につき三個ずつ配付し、忍耐強く紙類とプラスチック、瓶や缶を分類するよう教えました。

初めのころ、村人たちは慈済ボランティアが「ゴミ拾い」に来たのだと思っていました。しかし、ボランティアが忍耐強く説明し続けた結果、村人は次第に資源回収で地球を浄化することができ、その収益で困っている人を助

けることができると理解するようになりました。今では、回収車の音楽を聞くと、自発的に回収物を出すようになりしました。

このように純朴な村の善良な村人には感動させられます。リサイクルするのは営利のためではなく、資源を大切にして省エネと二酸化炭素の排出を減らすためです。ゴミとして捨てられたものの中には、回収して再生できる物があるのです。そして、一歩進んで、源から汚染を避け、清潔に回収して細かく分類すれば、品質の良い再生品になります。

業になるのです。問題を改善したいなら、自分から始めなければならず、智慧のある行動で、人々の見解の違いを克服し、真心から天地を愛護することです。天地が健やかになれば、人類は平和に暮らせるのです。

精進して法悦を得、 見返りを求めず感謝する

フィリピンのケソン市の違法建築が密集した貧民地区で、二月二十八日早朝大火事が発生し、三百世帯の人が家を失いました。慈済ボランティアはただちに見舞いに駆けつけ、救助に当た

慈済ボランティアは共通の認識と行動で、環境保全の理念を宣伝していません。現在、環境保全の問題は国際社会で重視されていますが、ゴミも大気汚染も、全ては人類が作り出しているのです。現代社会では、セールの概念が横行し、消費を奨励しています。一時の快感や欲望のために消費しては物を捨てる悪循環が続き、膨大な量のゴミが生まれています。

四大元素の極端なアンバランスは、人類の行為に行きつきます。心から行動へと少しずつ蓄積して、長期的に衆生が共に責任を負わなければならない消防隊員と被災者のために炊き出しを行いました。

被災地は静思堂から車で五分の所にあり、住民と慈済人は長年交流があります。彼らは慈済精神に賛同し、多くの人が慈済会員や環境保全ボランティアになっています。被災者のヨールッタは家が全焼し、何も持ち出せませんでした。六人の孫が全員無事だったことに感謝していました。彼女は長年にわたり毎週水曜日、静思堂に参拝していました。火災直後、ちょうど精進の日でした。ヨールッタは、ボランティアからグレーの制服を借りて、静思堂に参拝した後、環境保全センター

で朝食の準備を手伝いました。

彼女の心は平静で、火事は彼女の精進に影響しませんでした。彼女は被災者から一転して、ボランティアと共に苦しんでいる隣人をケアする英雄に早変わりしました。

火災は無情ですが、温かい人情味に溢れていました。この世に苦難は多いものです。ですが、愛さえあれば心の傷を癒すことができ、心を広く持てば悩みは消えます。

アフリカのモザンビークで二月半ばに突然ゴミの山が崩壊し、家屋が押しつぶされ、十七人が死亡しました。慈

濟ボランティアはすぐさま出勤しまし

たが、豪雨で道路は冠水し、古い車はエンストしてしまいました。車を降りて皆で押しましたが、動きません。心に焦りを感じながら徒歩で被災地まで行きました。

彼女たちはきちんとした身なりで、被災者に対して善意と尊重の態度で接し、被災者のニーズを聞き取っていたため、役人も感動し、安心して慈濟に配付と炊き出しを任せました。暑い気候の中、避難所で衛生問題が持ち上がり、ボランティアが支援の内容を相談した結果、バケツと石鹸、歯ブラシ、

歯磨きなどを配付することにしました。被災者は整然と並んで受け取っていました。

遙か遠方にいる弟子たちの生活は豊かではありませんが、心は豊かで、自分よりもっと貧しい人たちを支援しています。尊重と愛を奉仕する輝かしい人性の現れです。愛こそがこの世の希望であり、愛のある良能だけが輝くのです。

誰であっても、その人の困難はその人の人生において、避けて通れない災難なのです。縁と必要性があれば、慈濟ボランティアは精一杯支援していま

す。どんなにこの世で頑張っている、困難は避けては通れないものですが、その境地に左右されないことです。奉仕に見返りを求めず、相手が身心共に安らかになり、喜んでくれた時、自分も法悦が得られるのです。

菩薩行を修めるには、感謝の心が必要です。大勢の衆生がいなければ、菩薩の道を歩くことはできません。しかし、その道に留まっていはいけません。歩いてきた道に執着せず、精進に励めば、喜びが得られます。妨げになるものは何一つなく、一段また一段と心の境地を高めることができます。

六度万行の最たるものは布施
誰もがいつでも始められる

三月中旬、アメリカのボランティア
陳思晟が花蓮に帰ってきた時、ハイチ
での活動を報告しました。彼は一袋の
硬貨を携えていましたが、それはハイ
チの現地ボランティアが、二月六日に
発生した花蓮地震を知って、何度も台
湾を祝福する場を設け、そこで集めた
義援金でした。

その袋の中は大部分が十セントや五
ドルなど小額のものでした。五ドルは
即ち二元（一元は約三・五円）です。数

配付を行っており、おかずがなくても
一膳の白いご飯が食べられることに、
貧しい彼らはとても満足しています。

人々の苦境はこの世の地獄さながら
ですが、衆生を護る地藏菩薩のような
人たちもいるのです。フェニックスの
如済神父は辛くて険しい環境に耐え、
忍びない思いでそこに留まっています。
彼は慈済が台湾からの愛の米を学校に
配付してくれることに感謝しています。
彼の学校は三食にこと欠く貧困家庭の
生徒が多く、少なくとも月曜日から金
曜日までは、学校でご飯を食べること
ができるのです。

昨年、如済神父は台湾に来て慈済を

えると数百元になり、貧しい彼らにと
って容易な額ではありません。その心
にとっても感動しました。

ハイチは一九九八年と二〇〇八年に
甚大なハリケーン被害に遭い、二〇一
〇年には大地震に見舞われました。慈
済ボランティアは十年余りそこを離れ
ていません。陳思晟はこの八年間に
七十回以上も往復し、貧しい住民の生
活状況をよく理解しています。昨年ド
ミニカの台湾人ビジネスマンが一万足
の靴を贈りましたが、受け取った人々
はもったいないと言って履きませんでした。
この数年間、慈済は絶えず米の

訪問し、感動と喜びに満たされてハイ
チに帰り、仏法を説いて、群衆の中で
それを実践しました。支援を受けた住
民の中には、現地ボランティアになっ
た人もいて、読書会に参加した時の身
なりやマナーは整然としていました。
活動の間も勝手に出たり入ったりせず、
皆一緒にお手洗いに行き、整列して席
に戻りました。彼らは慈済宗門に感謝
し、静思法脈を尊重しています。

慈済の発祥地からハイチは非常に遠
いのですが、徳と法の香りは何の障害
もなく海を超えているのです。彼らは
感謝の気持ちで恩返しをし、奉仕した
いと望んでいます。「私は五ドル持って

いて、一ドル寄付したいのです。四ドルのおつりをくれますか？」と彼らは言います。それはけちではなく、五ドルしかなくてもその五分の一を布施したのです。布施は金額の多寡ではなく、その真心が尊いのです。

この世で行う菩薩行の「六度万行」の六度は、最初が布施です。布施はお金と時間があるから行うものではありません。人々を利する話をし、人々を励まして信心を持たせ、身心を使って人の負担を軽減するのです。それらは全て布施であり、誰もがいつでもできるのです。

真実かつ柔和な言葉を使い、悪言を言

わず、二枚舌も妄語も綺語も口にしてはいけません。また、互いに誉め称え、成就し合い、良いことは皆で行うのです。

自分自身が修行して群衆の中で実践するのが「妙徳」であり、自分の安楽を求めず、衆生を利するのです。布施、善行、善い教えは、あらゆる衆生に喜んで法を求める気持ちにさせます。もし救う側と救われる側の心が互いに通じ合えば、衆生が悟りを開くのは困難なことではありません。

● 凡夫は毎日忙しく、心の「浮き沈み」の中で、あることに専念したと思つたら、知らないうちにまた方向を変え、自分の

見聞きした感覚に執着してしまいます。虚妄の念にとらわれ、見たものに執着するから多くの煩惱にとらわれ、また、警戒心がないたため自然のままに人生はこの世で迷ってしまうのです。

幾重もの悪癖に縛られ、無明がますます厚く覆いかぶさり、心の光明を遮ってしまいます。長い間塵の中で迷えば、ぼんやりした霧の中で見る光景ははつきり見えるのでしょうか？ 人それぞれ考えや見方が異なるものです。一人一人が「我」に執着し、道理も分からないでいるなら、この世は渾沌として乱れるばかりです。

人は皆、真如の本性を持つており、仏

法の力を借りて無明を払いのけて、頑固な考え方を打ち破ることができるのです。仏の力を借りる場合でも、自分の力が必要です。時は素早く過ぎ去り、二度と戻りません。仮に善念が芽生えても、善悪が綱引きをしているような状態では、いつになったら善法をしつかりと心に留めることができるのでしょうか。

法をただちに用い、慇懃に精進すべきです。怠けてはいけません。皆さんが心して善念を保ち、人を利すると同時に自分をも利し、心に慧光を輝かせ、妙法を透徹して「垢から離れて染まらず、清らかで明るく」あるよう願っています。

（慈濟月刊六一七期より）

人生の酸いも甘いもカメラで捉える

私はレンズを通して感動的な場面を見てきました。目頭が熱くなり、心が温まります。世間には苦難が多いですが、人々は勇気を奮い起こし、善行へ向かっているのです。私は撮影という責任を担う中から学び、奉仕とは幸福であることが身にしみました。

慈済の撮影ボランティアに参加してから一年余りの私は、二〇一七年に国際慈済人医会の年度会議活動を記録した際、深い感動を受けました。そのような感動は四つに分けられ、中国語では酸、甜、苦、辣という漢字で表されます。

この「酸」と言う字が何を指しているかと同じ慈済の人文真善美ボランティア（メディアボランティア）に聞くと、みんな「手酸」、「脚酸」、「腰酸」と争って連想しました。筋肉痛やしびれて痛いという意味で、その感覚が「酸っぱい」と

いう味覚に似ていることから、この漢字が用いられます。

「いいえ、違います。それは鼻にこみ上げてきて拒みきれない酸っぱいような気持ちなのですよ」。私はいつも、まずメンバーの研修中の様子を撮影し、それから写真を選んで、説明も加えて編集していきます。彼らの輝いている顔を見ると、自分も嬉しくなります。もしも涙がこぼれてくるような写真を見つけたら、感動でいっぱいになるのです。

心のシャッターを押すだけでなく、手のシャッターもすばやく押さなければいけません。静かで荘厳な経堂の中ではシ

ャッターの音が余計響いてしまい、「師兄（男性ボランティアへの呼称）、シャッターの音が大きすぎますよ」といつも言われています。

撮影に集中力を傾け、感動的なシーンを一つまた一つと細かく記録していきます。これは任務ではなく、また、義務でもありません。ただ単純に幸せを感じるだけです。しかも人文真善美ボランティアとしての幸福です。

幸福は遥かな彼方にあるのでしょうか。少し注意深く見回せば、幸福は目の前にあるのです。

十月六日、世界慈済ボランティアのり

リーダーである黄思賢氏の講演の日、私は記録係を担当しました。会場の前で研修メンバーの斜め下にカメラを構え、膝を



床につけてあちこちに移動していました。カメラのレンズをある女性に向け、耳を傾けている彼女に最も自然な表情が現れるのを待っていました。

そして、シャッターを押した瞬間、「人文真善美ボランティアの仕事は本当に大変ですね」とある師姐（女性ボランティアの呼称）から声をかけられました。「いえ、大したことではありませんよ」と私は言い返しました。汗だくだくの私を見て、彼女はティッシュペーパーを私にくれました。それから、多分足りないだ

●慈濟人医会の年度会議で団体写真の撮り方を説明する葉唐銘。

ろうと思ったのでしよう。またバッグから一枚のハンカチを出して私にくれました。「これはご縁あつて慈濟精舎の尼僧から頂いたものですが、どうぞ使ってください」と言いました。

当時の私はそれを聞いて心が温かくなり、キャンディーをもらった時よりも幸せになった気がして、心にしみ込むような甘さを感じました。

心を奮い起こした二言

二〇一七年の慈濟国際医師会（TIMA）の年度会議に、二十カ国・地域から

四百人以上の医師が集まり、治療経験などを分かち合っていました。医師たちが貧困や病気に苦しむ難民を治療し、自分が病気になった時も、恵まれない子供や植物人間の患者に積極的に治療を行ったり、辺鄙な所へ往診したりする貴重なシーンの写真を見せてくれました。

黄思賢氏の話によれば、アメリカでは連続的に襲ってきた大型ハリケーンハービーとイルマにより、多くの家が壊され、被災がひどいテキサス州ヒューストンでは、数千人の警察や消防員が救援のため各地を走り回ったということです。

その人たちの苦を見て、私の心も辛く

なって、自分の力があまりにも小さ過ぎると思いました。苦を見て福を知り、福を惜しみ、さらに福を植えていくべきです。人々は力を尽くすうちに、小さな力も積もれば大きな力となることを、見落としてはいけません。

十月五日、研修員たちが静思精舎に戻って、私は少しの油断で感動な画面を失ってはいけなさと心配になり、制服が汗や雨に濡れることさえも気にせずじつとガイドをしている尼僧に付いていましたが、幸いに二人のボランティアが順番で私とカメラの設備に傘をさしてくれました。心から感謝しています。

あらゆることを見逃さず、衆生の苦難に心から関心を寄せていらしやるのです。人はまず自分の体の面倒を見てから、それでこそ気力が湧き、良いことができるのです。そして、自分の心を清めて初めて人を助ける志が固められるのです。

よその人から見ると、単なる短い二言だけですが、私は目が覚めたような気がして、勇気を奮い起こされました。

大型の国際研究会にて、私は責任を担う中から学び、そして学んだ中で奉仕とは幸福であることが身にしみました。「ボランティアをする中で学び、学ぶ中で気

昼食後、私たちは證嚴法師にお会いしました。こんなに近くで證嚴法師にお会いするのは初めてだったので、本当に嬉しくてたまりませんでした。「年度会議の速報をちゃんと作っていますか」と證嚴法師が尋ねられ、「はい、作っております」と撮影担当の陳榮豊師兄スーシェンはすぐさま答えました。證嚴法師はうなずいた後にその場を離れましたが、何歩か歩くと振り返り、ちょうど私の目の前にお立ちになって、「ご飯をたくさん食べてね。それでこそ仕事ができますよ」と声をかけてくださいました。

私は深く感動しました。證嚴法師は

づき、気づく中で悟る」。ただ知っているだけで、何もしないままでは何も学ぶことができません。手に入れても、もっと深く学ぶべきであり、それでこそ深く感動することも、懺悔することもでき、知恵さえも得られるのです。

感謝のうちに奉仕し、奉仕する中で相手を尊重し、奉仕すればするほど、大きな力になって、愛の心も広がります。行い難きを行えば、その菩薩道には常に経験とエネルギーが積み重なり、自分が成長していけるのです。

(慈濟月刊六一四期より)

錬磨

◎文・釋徳仇／訳・濟運



人は群衆の中で良縁を結び、
錬磨するが、
仏道もそこで究めるのである。

元氣を出して、新たな一步を踏み出す

十四日間の台北への行脚中の二十四日、證嚴法師は北区の慈濟ボランティアに、高齢のボランティアたちは自分を年寄りだという感覚を捨て、五十歳分を「寿命宝蔵」に預け、豊かな人生経験を使って壮年の頃の精神で以て新たな一步を踏み出すよう今一度開示した。

台湾在住の日本人、田中旨夫さんは一九一八年生まれで、今年百一歳になるが、慈濟の養成講座に申し込みたいと言った。「私は彼が講座を終え、認証を授かるまで待っています。彼は百歳を超えていても、背筋はぴんと伸びており、彼より若い私たちはもつと頑張らなくてはなりません」と證嚴法師が言った。

證嚴法師は、人は誰でも仏と同様に悟りを開く智慧を持ち、仏の心の世界に到達して、無意味な煩惱や雑念で心が満たされないようにすることができると話した。

話を聞いていた多くの古参の慈濟ボランティアは、これまで何度も慈濟の災害支援活動に参加して来た。一九九九年の台湾中部大地震の緊急支援と大愛村の建設、そして学校再建プロジェクト「希望工程」の景観建設などにも参加した。自分の心から出た誠意ある行動は、どんなことでも経験したことは全て自分の人生における一幕となるのである。



「この世の苦難を目にし、人間菩薩じんかんぼさくの出現も見てきました。皆さんは、無縁の人の痛みを我が心に感じて慈悲を施してきました。まさにこの世の人は皆家族です。皆さんは、生命の共同体という境地に達しており、誰もが奉仕する過程で智慧を蓄積させています」

『寿命宝蔵』が設立されたからには、誰もが若返って生命力を発揮し、活力を発揮して新たな人生を切り開くのです。皆さんが若い人を受け入れ、心を一つにすると同時に、お年寄りを世話し、お互いに励まし合って、共に慧命を伸ばしていくよう期待しています」

空の玄関口は宝の山

桃園静思堂で慈濟ボランティアたちとの座談会が開かれた。

證嚴法師は《法華経 化城喻品》の经文、「様々な悪路を通り、やつと智慧の長者が神通力で作った仮の城に着いた。しばしの休息の後、再び宝の山に向かって歩き出した」という部分を引用して、桃園国際空港のある桃園は海外の慈濟ボランティアが台湾に振り立つ最初の地であるため、現地ボランティアが一層精進して、来訪者に菩薩の模範を示し、「宝の山が近い」ことを感じてもらうと共に、仏法に対する信心を深めてもらえるよう期待している、と言った。

「桃園は台湾の空の玄関口であると共に、真の菩薩の宝塔です。深い情の繋がりと大愛を広めるとても良い縁に恵まれていることを大切にし、その機会を逃してはいけません。海外のボランティアはわざわざ台湾に心の拠り所を求めに来るのです。桃園の慈濟ボランティアは一年間に心して学びに来た数多くの菩薩を送迎し、菩薩道での修行を成就させています。彼らに慈

済の種子を持たせ、そこから無限に広げて衆生を救っているのです」

證嚴法師は桃園地区のチームリーダーが、どんなに忙しくても勇猛に任務を引き受けていることに感謝した。単に任務を遂行するだけなら簡単だが、人にはそれぞれ気性と悪癖があり、幹部として多くのボランティアの先頭に立つことは容易ではないからだ。

「仏は悟りを開く前、菩薩道の六度万行を凡夫たる衆生の中で達成しなければなりません。群衆と共に諸々の機能を發揮するには、できる限り多くの良縁を結ばなければなりません。苦勞を嫌って責任を負うことから逃げてはいけません。絶えず錬磨し続けてこそ、光を放つ本質が現れるのです」と證嚴法師は話した。

(慈濟月刊六一六期より)



書籍情報 「刀下春秋（メスを手にした歲月）」

◎文・林欣榮（花蓮慈濟医学センター院長）
訳・慈願

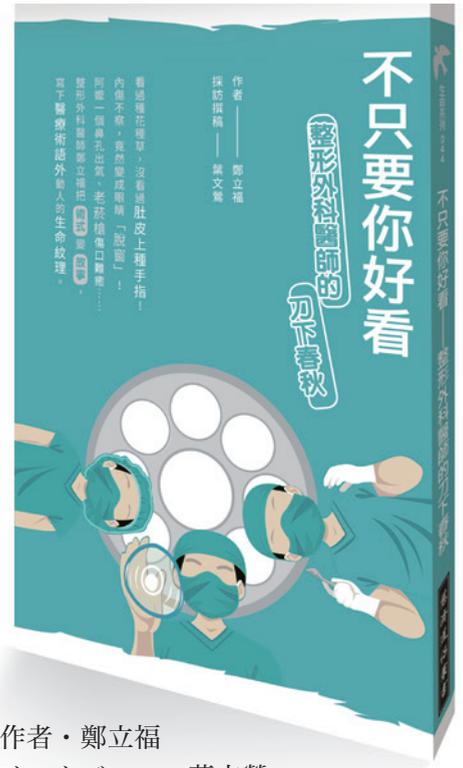
執刀の後に省みること

鄭立福医師の著書『刀下春秋（メスを手にした歲月）』では複雑で困難な様々な治療過程が見られる
鄭医師と患者との間の交流や医師としての用心なども

台湾では美容形成外科病院が乱立するためか、整形外科に対して一般の人が持つ印象といえば、隆鼻術、豊胸、目袋や皺の除去といった、顔などの美容整形を連想するだろう。しかしそのような美容

整形は整形医学全体から見れば、ほんの小さな一部分に過ぎない。

整形医学では先天性奇形、腫瘍切除と復元、火傷の植皮、顔面外傷、口蓋破裂（みつくち）の復元、皮弁復元（血流の



作者・鄭立福
 インタビュー・葉文鶯
 発行者・慈濟道侶叢書出版
 サービスセンター
 ☎02-28989000
 内線 2145



送付の申し込み・ページへようこそ
<http://web.tzuchiculture.org.tw/index.php?s=3>

ある皮下組織や深部組織の移植方法)、
 性転換手術などは専門の整形外科医によ
 る治療が必要である。花蓮慈濟病院では。

人々に整形外科について正しく認識して
 もらうため、二〇一七年に「整形・復元
 外科」と名を改めた。

花蓮慈濟病院に二十年以上も勤務して
 いる鄭立福医師は、整形と復元の担当医
 師として無数の患者を診ているだけでな
 く、台湾の医学界のために優秀な若い医
 師を育成している。患者からは情け深い
 患者中心の治療を行う「仁医」と言われ、
 学生の間では臨床経験が豊富で、授業に
 熱心で、ユーモアのある良師益友と慕わ
 れている。

著作『メスを手にした歲月』には、彼
 と患者との間に発生した事柄が生き生き
 と書かれている。血管断裂、足の切除、
 指の切除、糖尿病による足の切除、毒蛇
 に噛まれた時の処置、皮膚糜爛、褥瘡、

傷跡の萎縮、肘トネル症候群、血栓に
 よる筋肉糜爛、橈（前肢内側）神経損傷
 などの症状についてだけではない。最も
 重要なこと、すなわち目に見えない患者
 との触れ合いの数々、また医師としての
 心構えが伝わってくるのだ。

整形と復元科医師がメスを持って疾病
 と向かい合わねばならない時、大部分は
 複雑である上に多くの困難を控えてい
 る。その中でも糖尿病患者の足のケアは
 積極的に血管処置を行う必要がある、下
 肢血流が改善するようにさらに皮弁（血
 流のある皮膚皮下組織や深部組織の移植
 方法）の復元と高圧酸素治療などと配合

して、糖尿病患者が足を切除せずともよいようにしている。

「この足は私自身の足であり義肢ではないのです」と、右足の踝を大理石の板に押しつぶされて骨折した六十過ぎの男の人が言った。当時、右足には傷口がなく、三カ月後骨折は徐々に回復していたが、左足に不思議な傷口が現れた。二カ所の病院を回って診察を受けた結果、筋肉が腐乱していることが分かり、切開して洗浄した。膝のくぼみにある膝裏側の動脈が切れたことによるもので、大理石に押しつぶされた時、同時に左足の腿の裏側も圧迫を受けていたのを、ただの鈍

痛として見過ごされていたのだ。

この患者は旧暦二日に、花蓮慈濟病院へ受診にきた時には感染指数が高く、当直をしていた鄭医師はただちに筋肉膜を切開して壊死した肉を取り除き、徹底的に洗浄した。しかし三日経っても傷口は相変わらず黒く、左足はこれ以上維持できないので切除する可能性があると言われ、本人と家族は悲しんでいた。

その夜の回診の時、鄭医師は「壊死組織をもっと洗浄すれば、この足は切断しなくてもすむのではないか」と考え、患者に「明日の切断はしないことにしましょう」と言った。その実、患者の傷口はひ

どく糜爛して膿は悪臭がひどいので、やはり切断して感染を防ぐことが最も早い方法ではなからうか、しかし患者の生命にかかわるほどではないのだから、軽々しく切断に踏み切らなくても、と考えていた。そのように一週間に一度の洗浄手術を行った結果、三回目の手術の後になんと生機の現れである肉がついてきたことを発見したのだった。

それ以外に、毒蛇が出没する農村や田舎では蛇に噛まれた時にどの科で診察を受ければいいのかが問題となっていた。毒蛇に噛まれた時は通常急患センターにかかり、毒蛇の種類によって適切な血清

を注射してから整形外科へ行く。なぜかというと百歩蛇に噛まれた時は、すぐに筋区画症候群を発症するし、コブラに噛まれた時は組織壊死と細菌感染の恐れがあるため、血清の注射が一刻を争うからだ。その後、整形外科で傷口の洗浄と植皮等の治療が行われる。

鄭立福医師の著書には、読者が整形外科の治療の真実に触れながら疾病を認識できると同時に、衛生教育についても分かりやすく書かれている。また、文章には鄭医師の患者に対する誠意が溢れていて、一読に値する一冊だといえる。

(慈濟月刊六一三期より)

銀髪の宝を抱きしめる(下)

◎文・葉又華 撮影・黄筱哲 訳・本誌

仕事に出かけられるのは
平穏な証拠

劉新金さんが五日間続けて欠席しました。謝素珍さんはバスの中で彼と偶然に会いました。病院へ長期処方薬をもらいにいくところでした。

謝素珍さんが耳の側で指を折り、何日から姿を見なくなったのかと数え、心配で彼の自宅まで訪ねたことを伝え、「もう十日間休んだのよ」と悪戯っぽく

他人に必要とされていることを感じた。翌日から毎日時間通りに現れ、午後五時まで忙しく働いてから帰るようになりました。

オーダーメイドのケア

謝素珍さんは以前テーラーの仕事をし

ていたとき、いつも客の要求に応じて服を直していました。客が口に出さなくても、彼女のテーラーとしての鋭い勘で、客のためにできるだけのことを考え、細かい所まで仕上げていました。

この優しさは、環境保全ボランティアとの交流においても現れています。「自分の父や母に接するのと同じです」と大勢のお年寄りにはいつも笑顔で接しています。

しかし、年を取ると人間は心身の機能が衰えてゆき、日常生活のリズムや情緒、人との交流などに変化が生じ、環境になれず不安感を抱いてしまうこともあるのです。ボランティアのケアチームは人数が多

いお年寄りたちのケアでかなり苦勞をしました。血圧を測る医療ボランティアの張敏如さんによると、家庭や仕事で忙しい子供たちがもうすぐ老年に入る自分に関心を寄せて来ると、何日間か楽しくなるのです。同様にテンポが速く、人間関係が疎遠している都会では、お年寄り達はいつものいっばいの関心を期待しているのです。

謝素珍さんによると、多くのお年寄りは十年以上リサイクル活動を続けており、お互いに知り合い、思いやる感情も生まれているため、「愛の貯金」は十分にあり、お互いに暗黙の了解ができて上がっているのです。新しいお年寄りが

入ってくると、彼女はいつも自らその人をそれぞれの区域で最も経験豊富で長く関わっているお年寄りに付き添いを頼みます。「皆さん、新しく来た菩薩の面倒を見てください。ここに来て良かったと思えるように」と彼女は言います。

たまに認知障害のあるお年寄りが家族の同伴でやってくる場合もあり、謝素珍さんはいつも忍耐強く笑顔で家族に説明します。環境保全ステーションではテンポが速く忙しいため、ボランティアの世話が行き届かないこともあるから、家族も一緒に来て「一緒に彼を愛しましょう」と伝えています。

經典の勉強を始めました。この日、四十人あまりのお年寄りが講師の羅恆源さんと因縁果報についてディスカッションしました。終わりに、羅恆源さんが皆さんに感想をお願いしたところ、七十六歳の戴おばあちゃんがマイクをにぎり、時間をかけて、今まであまり人に話したことのない臨死体験を話してくれました。

一貫道を信仰している彼女は仏堂で礼拝していた時にショック状態を起こし、病院の救急外来に運ばれました。昏睡状態だった時、かすかに仏様を見たような気がしました。

戴おばあちゃんの体験談が共鳴を呼

毎日現場で走り回る謝素珍さんの背後には、もう一組のボランティアケアチームがいます。環境保全活動の幹事を務める林秀綱さんは、季節の変わり目になると、お年寄り達は体の不調を訴えることがよくあるので、ケアチームがその家を訪ね、とくに独居のお年寄りには生活上の支援が必要かどうかを訊ねるようにしている、と言いました。

隣人をケアする

三年前から、ボランティアグループは毎週水曜日の午後勉強会を開いて仏教



●環境保全ステーションでの仕事は忙しく、謝素珍さん（左）はひっきりなしに電話を受け、双和地区の各回収ステーションの物資の運搬状況を把握しています。

び、参加者がささやき始めました。そこまで話を聞けばもう、未知の将来を怖がることはないのです。

羅恆源さんは幼い頃から田舎の農村に住み、お年寄りとコミュニケーションを取ることはごく普通のことでした。農村で信仰されていた宗教はほとんどが仏教と道教が入り交じった民間宗教でしたが、大自然に畏敬の念を抱き、因縁果報を信じていました。羅恆源さんは仏法の教えをお年寄りたち年長者が受け入れられる話に変えて話すのが上手です。

ケアグループにとって、勉強会は意外な面をもたらしました。お年寄りが自分

穎慧助教授は、年長者の長期介護は地域の組織に頼らなければならないと言っています。その理由としては、地域のメンバーはお互いによく知っているため、共通認識や暗黙の了解を培いやすいほか、年長者一人ひとりの生活習慣と人間関係を熟知しているからといます。「彼らは地元の人との付き合いが多いとも限らず、地域での奉仕は長く続けなければなりません」と話しています。

●謝素珍さんは息子さんを連れてリサイクル活動をしています。息子さんは徐々に心を開いてゆきました。彼女も息子を世話する母親から、環境保全ステーション全体を世話する窓口の責任者となりました。

の心情や悩みを打ち明ける時、ボランティアは皆耳を傾けて聞き、必要に応じて、適時に彼らが必要としているケアや援助に手を差し伸べています。皆その地区の慈済委員で、いつもお互いに気づいた異常や、適切なケアの仕方を話し合い、適時に補い合って、ケアのネットワークを形成し、シルバー世代のボランティア達を大切に見守っています。

万全なネットワークを織り成す

高齢化を研究し、同時に長期介護拠点の評価委員を担当していた慈済大学の謝





そして、謝穎慧さんは、長者達はボランティアの奉仕活動を通じて、家から外に出て社会に参加すれば、人間関係のネットワークと連携しやすくなると言いました。お年寄りが何日も現れなかったら、ほかの地域メンバーがすぐ連絡を取って関心を寄せます。体調が悪かったり、一人で対応できなくなる危険性を減らすことができ、「お年寄りが社会のネットワークから外れ、ケアされないのを防ぐことができます」と話しています。

ケアグループは癌で亡くなった張おばあちゃんのことをふり返ってみました。

普段は一人で住んでいましたが、病气し
てからは息子さんが食事を持って来てい
ました。引退するまで会社の管理職をし
ていたせいかな、張おばあちゃんは男勝り
で、張おばあちゃんと同じ分類ゾーンで
隣に座っていた許おばあちゃんは、毎朝
張おばあちゃんのためにお茶を用意しま
した。「張おばあちゃんはほとんど人と
も話をしないので、特別に彼女の面倒を
見て一人ぼっちにさせないようにしまし
た」と話してくれました。

ある日、ボランティアの呉燕雪さんが
リサイクルステーションに行く途中、道
端で休憩していた張おばあちゃんに会い

ました。暖かい日差しの中で張おばあち
やんの白い髪が光っていました。呉燕雪
さんはしばらく彼女と一緒に座っていま
した。それから彼女が起き上がるのを補
助した後、続けてゆつくりとリサイクル
ステーションへ向いました。

「張おばあちゃんがこの人生で一番好
きなことは、おしゃれをすることでした。
たとえ病気になるっても、毎日やはりきれ
いにしていました」と紀換さんがいま

●謝素珍さんはシルバーボランティアを訪ねる前
に、お年寄りが喜ぶ何種類かの果物を選びました。
お年寄りはよく心身の不調を訴えるため、不定期
に見舞っています。

03・22	<p>日本の実業家の林貴裕、手島收、橋本竜3氏がこの日、台北新店静思堂を訪れ、花蓮地震被害への寄付を行った。また、東日本大震災の際の台湾の民衆及び慈済の支援に対して感謝の意を表した。</p>
03・23	<p>タイ政府の社会発展及び人類安全部（MSDHS）と社会救助委員会は共同でIMPACTエグジビジョン、コンベンションセンターにて「2017年タイ優秀ボランティア表彰式典」を催し、慈済ボ</p>

慈済大事記四月

.....

訳・済運



●謝素珍の来訪に環境保全ボランティアは喜び、生活上の細々としたことを話し始めました。

した。ボランティア達が病院へ彼女をお見舞いに行ったとき、張おばあちゃんは意識がはっきりしていましたが、何となく自分の人生の終りが近づいていることを知っているようでした。

ボランティア達は彼女に付添って念仏を唱えました。三十分が過ぎて皆が帰る前、張おばあちゃんがすでに微笑みを浮かべて、穏やかにこの世を去っていたことを、誰も知りませんでした。

（慈済月刊六〇七期より）

04・10	04・06	
<p>モザンビーク慈済ボランティアはマプトゴミ山崩壊事故支援で、家庭の人員構成を見て買い物券の金額を設定する方式を採用した。1</p>	<p>モザンビークの慈済ボランティアは、2月下旬に起きた首都マプトゴミ山崩壊事故の後、引き続き避難所の被災者を見舞っている。アメリカの国際開発機構（USAID）は慈済に寄付金を託し、今日、1121本の歯ブラシ、411セットの衛生用品と慈済が提供した生理用ナプキン195パックが配付された。</p>	<p>◎慈済ニューヨーク支部の王萍華副執行長とマンハッタン連絡事務所の責任者梁翠萍は、チベット仏教センターと青年仏教連絡会、ジョージアダムダカラチャクラセンターが共同で催した祈福法会に招かれ、シリア難民支援用の寄付金約13000ドルを受け取った。</p>

04・01	03・29	
<p>◎「第6回国際慈済人医学術会議」が台北慈済病院で開かれ、台湾全土から315人の慈済人医会メンバーが参加した。今回のテーマは「大愛で衆生に付き添い、人医が末永く見守る」である。</p>	<p>慈済アメリカ教育志業基金会のメンバーは今日、ダラス慈済大愛幼稚園開設10周年記念行事に参加すると共に、オバマ中学校とバーバジョーダン小学校を訪れ、人格教育と静思語クラスの実施成果の報告を受けた。</p>	<p>ランティアの林雪銀が代表で優秀ボランティア賞を受け取った。タイ政府は毎年10月21日を「社会福祉の日」と「タイボランティアの日」と定め、優秀ボランティアを表彰しているが、今年は今日行われた。</p>

04・20	04・18	04・17
<p>慈済基金会は「マネーローディング防止及び不正資金とNGOの繋がりを防ぐ法令と実務」と題した教育訓練で、行政院のマネーローディング防止執務室の何凱婷氏を講師に招き、本基金会幹部、</p>	<p>オーストラリア・ニューサウスウェールズ州下院議会のトーマス・ジョージ副議長ら一行3人が外交部職員の付き添いの下に今日、慈済内湖環境保護教育センターと大愛感恩科技公司を訪れ、資源の回収と社会に還元する公益事業を賞賛した。</p>	<p>インドネシアのイスラム教団体「宗教学者復興会」のサイド主席は、17日と18日、インドネシアと台湾の慈済ボランティアの付き添いの下に、台北慈済病院と人文志業センター、内湖環境保護教育センター、慈済大学及び静思精舎を訪れ、慈済志業の発展状況を理解した。</p>

04・15	04・14	
<p>慈済グアテマラ連絡事務所はバレンシア市で貧困家庭への配付活動を行い、92世帯に黒豆、食用油、パスタ、再生毛布などが配付された。</p>	<p>慈済基金会は物を大切にし、資源を有効活用する理念で、今日、三重志業パークで指導ボランティアの養成講座を開き、約400人のボランティアが参加した。ペットボトルを使って灌仏会用の蓮の造花とろうそくの台座、水入れ容器の台座の作り方を学び、各地域で教える。約2000セットが完成する予定で、2018年の台北中正記念堂で行われる灌仏会に使用される。</p>	<p>人から3人は6000、4人から6人は8000、7人以上の家庭は10000メティカル（現地の通貨）で、今日、194世帯の1113人に支給した。</p>

		海外事務、財務などの関係人員38人が参加した。
	04・21	慈濟基金会外国語チームは新店静思堂で四大八法精進研修会を行い、マレーシアからの56人を含む約160人が参加した。このチームは1992年に結成され、定期的な勉強会の他、毎年3月に花蓮でキャンプを行なっている。また、2010年から毎年1回四大八法精進研修会が開かれ、古参ボランティアや志業体職員を招いて全て外国語で志業の方向と内容を説明している。
04・22		中国四川省成都市金堂県淮口鎮政府は慈濟基金会、成都大愛感恩環境保全サイエンスパークと合同で、「グリーンアクションで美しい淮州」に活動を展開し、慈濟ボランティアが民衆にゴミの分類を呼びかけ、その方法を示した。1年以内に5パーセントのゴミの減量を目指している。

善の扉

「慈濟ものがたり」をご自宅までお届けします

各慈濟連絡所では無料でお配りしています。(月1回発行。1冊)
ご自宅までお届けする場合は送料は年間NT\$120。

2冊以上ご希望の方は読者サービスセンターにお電話ください
日本に在住されている方は慈濟基金会日本支部にご連絡ください

郵送料のお振込み：台湾郵局口座：19905781 口座名：慈濟傳播人文基金會
読者サービスセンター電話番号：02-28989000内線1165

上記の郵送料は台湾国内に限ります。海外または離島の方は読者サービスセンターにお電話ください。
●インターネットでもご覧いただけます。URL <http://web.tzuchiculture.org.tw/index.php?s=7>

オンラインでの送付
申し込みはこちらへ



各国の連絡所

本部

971 花蓮県新城郷康樂
村精舎街 88 巷 1 号
TEL: 886-3-8266779
886-3-8059966
志業中心 (静思堂)
970 花蓮市中央路三段 703 号
TEL: 886-40510777 # 4002
0912-412-600 # 4002

花蓮慈济医学センター

970 花蓮市中央路三段 707 号
TEL: 886-3-8561825
玉里慈济病院

981 花蓮県玉里鎮民権街 1-1 号
TEL: 886-3-8882718

関山慈济病院

956 台東県関山镇和平路 125-5 号
TEL: 886-89-814880

大林慈济病院

622 嘉義県大林鎮民生路 2 号
TEL: 886-5-2648000

台北慈济病院

231 台北県新店市建国路 289 号
TEL: 886-2-66289779

台中慈济病院

427 台中県潭子郷豊興路一段 88 号
TEL: 886-4-36060666
FAX: 886-4-36021123

慈济大学

970 花蓮市中央路三段 701 号
TEL: 886-3-8565301
FAX: 886-3-8563604

台北支部 (新店静思堂)

231 新北市新店区建国路 279 号
TEL: 886-2-22187770

慈济人文志業センター

112 台北市立德路 2 号
大愛テレビ局

TEL: 886-2-28989999

静思人文

TEL: 886-2-28989888

アメリカ

総支部 (San Dimas)
TEL: 1-909-4477799
北カリフォルニア支部
TEL: 1-408-4576969
ハワイ支部 (Honolulu)
TEL: 1-808-7378885

カナダ

TEL: 1-604-2667699

メキシコ

TEL: 1-760-7688998

ドミニカ Santo Domingo

TEL: 1-809-5300972

ブラジル Sao Paulo

TEL: 55-11-55394091

イギリス

TEL: 44-20-88699864

フランス

TEL: 33-1-45860312

ドイツ Hamburg

TEL: 49 (40) 388439

オランダ Amsterdam

TEL: 31-629-577511

スウェーデン Goteborg

TEL: 46-31-227883

オーストリア Vienna

TEL: 43-1-7346988

南アフリカ Gauteng

TEL: 27-11-4503365

中国蘇州

TEL: 86-512-80990980

香港

TEL: 852-28937166

フィリピン Manila

TEL: 63-2-7320001

タイ Bangkok

TEL: 66-2-3281161-3

ベトナム Hochiminh

TEL: 84-8-38535001

ミャンマー Yangon

TEL: 95-1-541494

マレーシア

Penang

TEL: 604-2281013

Malaka

TEL: 606-2810818

シンガポール

TEL: 65-65829958

インドネシア Jakarta

TEL: 62-21-5055999

大愛テレビ局

TEL: 62-21-50558889

スリランカ Hambantota

TEL: 94 (0) 472256422

ヨルダン Amman

TEL: 962-6-5817305

トルコ Istanbul

TEL: 90-212-4225802

オーストラリア Sydney

TEL: 61-2-98747666

ニュージーランド

Auckland

TEL: 64-9-2716976

慈濟

2018年5月18日発行・257号
中華郵政台北誌字第909號執照登記為雜誌交寄
Printed In Taiwan

発行人 釋證嚴

発行所 慈济基金会

〒112 台湾台北市北投区立德路2号

編集 慈济日本語翻訳チーム

杜張瑤珍・王麗雪

校閲 山田智美

電話 (886)02-2898-9000

FAX (886)02-2898-9994

E-mail: 021620@tzuchi.org.tw

慈济基金会日本支部

〒169-0072 東京都新宿区大久保1-2-16

電話 (03)3203-5651 ~ 5653

FAX (03)3203-5674

E-mail: jptzuchi@yahoo.com.tw

tzuchi@tzuchi.jp

證嚴法師のお言葉、委員や会員の体験談、慈济に関するニュース等を日本の方々にお知らせする目的でこの小冊子を編集しました。日本語への翻訳は素人である私たちがしましたので、不備な点や、つたないところがあると思います。ご感想やご教示がいただければ幸いです。(日文組編集同人)



最高の笑顔 南アフリカ篇

27歳のサムケリソ・マグワザは慈済の活動にほぼすべて参加している。2015年に自動車免許を取るとすぐにボランティアに同行し、国境を越えたケア活動に参加した。笑顔で人々の心に希望の光をともしようと、ユーモアで人々を和ませたり、皆を楽しませた。疲れませんかと聞くと、首を横にふり、いつも笑顔で「すごく楽しいよ」と返事をしてくれる。（文・袁亞棋 撮影・連炳華 南アフリカ ダーバン）



慈済ものがたり